
夕方ブランコ

みもこちと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タ方のブランコ

【Nコード】

N8360S

【作者名】

みもこちと

【あらすじ】

ブランコでたそがれてると、兄に見つかった。

一人の帰り道、私はずっと苛々していた。

だから公園の揺れるブランコを見て、衝動的に乗ってしまったのだと思う。

公園からは小学5年の時に卒業した。最近は妹と一緒に遊びにくる程度で、その時でも妹を放って遊具で遊んだりはしない。

つまり、中学1年の私はブランコとは2年近くご無沙汰だったわけだ。

その上、周りは赤く染められていて、人影は見当たらない。ここで誘うようにゆらゆらしてるこの子に乗らずにどうする。

先程よりちょっと勢いをつけて、振りを大きくしてみた。スカートも浮かんだが、下はスパッツだから問題ない。

伸ばした私の足が見える。

かなり高くまであがりきり、落ちる瞬間、内臓がふわっと浮かぶような感覚が、妙な快感となる。これが好きで、小さい頃は公園に来る度乗っていた。

こんな大好きなブランコに、乗るのをやめたのはなんでだっけ？

考えながら、身体を低くして、後ろに引き、前へ思いきり動かす。そして視界に入る見慣れた姿に、眉をしかめた。

「何やってんだ、お前」

背の高い影は、私に気づいたと同時に、足早に距離を詰めた。その眉は私と同じくしかめられている。動きを止めないまま、私は答えた。

「ブランコ」

相手は兄の貴史だった。同じ中学校の3年生で、私のいらいらの原因である。

「それは見りやわかる。俺が聞いているのは、なんでこんな暗い中でブランコなんかやってんのかだ」

兄の声は不機嫌だった。

当たり前だろう。なぜなら私は兄と一緒に帰る約束を無視して1人帰ったから。

一応ブランコの揺れを小さくし、しかし眉間の皺をさらに深くして、兄を見た。もしかしたら、兄からは睨み付けているように見えるかもしれない。

「待ってろって言っただろ」

「長くなりそうだったから」

放課後、兄は声をかけられた。女の子に。

理由はもちろん告白で、もてる兄にとっては日常茶飯事だ。

でも私は見ていられなくて、兄の友人に先に帰る旨を伝えて、さっさと帰った。

「・・・断った」

「そうなの？」

教えられた結果に感じた小さな安堵をごまかすようにブランコをこいで、言葉が続けた。

「もったいないね。きれいな人だったのに」

賢そうな美人で、肩ほどのストレートの髪に、すらりと細い体をしていた。

きっと兄の隣に並んでも見劣りしないだろう。

容姿のレベルが違いすぎて、初対面じゃ親戚にすら見られない私とは大違いだ、と心の中で拗ねる。

「・・・」

私の言葉に、兄はなぜか痛そうな顔をした。理由がわからなくて何も続けられなくなる。

「・・・なんで、ブランコ」

いきなり兄が話を元に戻したので、空気を変えるために即答した。

「揺らりたい気分になることってあるよね」

会社帰りのサラリーマンがブランコでたそがれてるのと、同じ感情

な気がする。たぶん。

兄の顔がアホか、とでも言いたげな呆れた表情になった。

そのよく見る顔に、私は、ふとあることを思い出した。

記憶の中で、まだ可愛らしさを残した顔がブランコに乗って喜ぶ私に向かって言う。

——ガキくせえ

はんと鼻で笑うというムカつくおまけまでついていたと思う。

私は腹を立てた。その場で兄を叩いて、結局——公園に行かなくな
った。

子ども扱いされることが嫌だった。兄からは特に。

表情には出さず、うなだれる。

ブランコをやめた理由すら、兄だった。

あまりにも単純な自分が嫌になる。

私は無駄に綺麗な顔から視線を外して前を見た。

そして苛立ちのままに立ち上がってブランコを揺らす。さっきより強く。

前に揺れるたびにスカートが大きく広がる。視界を遮るくらいはためかせていたら、兄からツツコミが入った。

「おい、あんまりこぐな。目が腐る」

「失礼な！！」

スパッツはいてるから大丈夫なんですーと言ってやるつもりが怒号にかわってしまった。

横目で兄を見れば、そつぱをむいている。

本気で目が腐ると思ってるのか、好意的にみて注意を促してるだけなのか。

あまり素直じゃないことを最近知っただけに判断がつかない。
だから返事も無難なものに収まる。

「スパッツはいてるよ」

ぐいつと姿勢を低くして勢いをつける。兄の方はあえて見ない。

「変わらねえよ。見苦しい足を見せるなっつってんだ」

「太くて悪かったな！！！」

ほんつとくに失礼な奴だ。

しかし、目をむければ今度はしっかりとこちらを見ている。別に私

だって見せたいわけではないので、心の中で少したじろぐ。

ごまかすようにブランコの速度をあげた。さっきより高く。高く。

私の意図に気づいたようで、珍しく慌てたような声がかかる。

「おい！」

「せーのっ！」

長方形の板を思いっきり蹴って、空中へ飛び出す。ジェットコースターで下るような一瞬の感覚のあと、あっという間に地面につく。

そして、そのまま、足が前にすべった。

「げ」

私の身体が後ろにかたむく。

そういや、ローファアだった。なんて思いながら、くるであろう衝撃に備えて、ぎゅっと目をつむる。

しかし、いつまで経っても痛みがない。むしろ、なにか、あたたかい？

「バーカ」

近くで聞こえた声に驚いて目を開けると、兄の顔がアップだった。手は姿勢を崩した私を支えている。

奥には放り出されたような兄のカバンが見える。

あまりの事態に呆然としてると、手でしっかり立つようにされた。
身体から手が離れる。

我にかえって兄に言った。

「あ、ありがとう」

「お前重い」

反論はおおいにあるが言葉にできない。ごめん、と呟いて黙り込む。
兄はさつさとカバンを取りに行った。ついた土をはらって、ついでにすべり台に置いた私のカバンも片手にまとめて私の所に戻ってくる。

「帰るぞ」

言って手を出してきた。
何も持っていない方の手を、ごく自然に。

めんくらっていると、兄も自分の行動に驚いたのか気まずげな顔をしている。

さげられそうになった手を、慌ててつかんだ。

思ったより私の身体は冷えていたようで、あたたかな兄の手が心地よい。

「・・・あったかい」

何となく口に出す。そうかよ、とぶつきらばうに返された。

片手があたたまると、もう片方の手の冷たさが気になるのが人間って奴で。

熱を求めて、両手で兄の手を包んでしまった。

兄はびくつとしたが、手を振り払いはしなかった。

二人そろって沈黙する。

払えばいいのに、と思う。

冷たいとでもなんでも言つて、拒絶すればいい。
しないのは兄妹だから？

——血もつながってないのに。

私と兄は再婚のつれ子同士だ。

だから、欠片の血のつながりもない。

本当はずっと嫌われてると思っていた。

義理の兄妹になった時から暴言を吐かれたり、こづかれてばかりだったから。

でも暴言には暴言で返せるようになったし、デコピンされればすねを蹴ることができる。どこにでもいる、ちょっと仲の悪い兄妹になっていた。

だから、優しくされると、戸惑う。
忘れようとした気持ちがでてきてしまう。

家族なのに。

家族になりきれない。

悔しさで目に涙が浮かんでくる。

こぼれるほどじゃないけど、涙目にはなっているだろう。

辺りはもう薄暗くなっていて、背の高い兄にはうつむいた私の顔は
見えない、と思う。

2人の手の温度が同じになった頃に、私は手を離れた。

ついでに自分のカバンも持っていく。

顔を上げると、兄はすでに私に背をむけていた。

急いで目をこすって涙を消す。

そんなことしていると、兄から声がかかった。

「コンビニ、行くぞ」

「え？」

「風花に何か買って帰る」

風花は妹の名前だ。

再婚後に生まれた子だから、私と兄のどちらとも血がつながってい

る。

兄も私と同じようにたいへん妹を可愛がっているので、何か買って帰ろうと思うのも不自然ではない。

そのコンビニが遠回りでなければ。

もっと遅くなるよ、なんて言葉は胸にしまつて、兄の隣に並ぶ。

「シュークリーム買おうよ。風花、甘いもの好きだし」

「それはお前だろ」

「私もだけど」

甘いものがあまり好きでない兄はちょっと顔をしかめたあと、小さく言った。

「——千紗都に任せる」

千紗都なんて、兄から久しぶりに呼ばれた。
嬉しくて顔が緩くなる。兄はこんなことだけで私を喜ばせてしまう。

うん、と頷いて街灯の下で兄と歩き出した。

（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

これは、三兄妹の昼寝 より前の話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8360s/>

夕方のブランコ

2011年5月14日09時47分発行